

「グローバル化」を検討する歴史総合の授業構築

—じゃがいもを題材とした授業例—

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 中等教科教育分野 小尾 英廣

1. 研究の背景

2006年の「世界史」未履修問題を契機に、日本の高校歴史教育は、大きな注目を集めるようになった。例えば学会会議では、2016年の提言で高校歴史教育の課題として、「思考力を培うよりも「知識詰め込み」型に陥る傾向が強く、生徒が興味や関心を持ちにくくなっている」、「世界史的な関心が薄くなりやすい」、「日本史についても、世界史から切り離して一国的に学ぶ傾向が強い」の3点が挙げられた。これらの課題を解決し、生徒がグローバル化する社会の中で生きていくために、世界史教育におけるこれまでの教育内容の見直しが求められるようになっている。

これを受けて、小尾（2023）では、世界史教育に必要な要素を研究した。その中で、「多面的（学習対象としている社会的事象自体が様々な側面をもつこと）・多角的（社会的事象を様々な角度から捉えること）な視点が入っているか」、「横の歴史の（空間的な）見方を取り入れているか」、「現代とのつながりを意識できるか」の3つの要素が必要であることを考察した。

加えて研究では、生徒が歴史を学習する際にどのようなことを意識しているかもアンケートを用いて調べた。項目は合計14個あり、①基礎的な歴史の知識、②その国の歴史の古代から現代までのつながりなどの世界史教育の課題から考案した7項目と、⑧参考書にはないより専門的な内容、⑨国同士の交わり・文化交流関係など、一昨年度の研究実践校での授業観察を踏まえて考案したものが7項目である。

これらに対して本研究では、一昨年度の研究と同様、グローバル化する社会の中で主体的に生きる市民育成を目指す観点を視野に入れつつ、3つの要素の実効性を検証する授業の構築を目的とした。

その中で一昨年度の研究において、生徒は基礎的な知識の習得と多面的・多角的な見方を特に重視している傾向があることがわかった。一方で、世界史教育の課題とされてきた授業が知識の習得に偏っていることや、時系列的な縦の歴史の見方のみがされていることも、生徒たちは学習の中で重要視していることも確認された。そのため、本研究では、知識の獲得や時系列的な縦の見方にも着目して、授業を構築するようにした。

また、一昨年度は3つの要素の内、「多面的・多角的な視点が入っているか」に重点を置いた授業であったため、今年度は、3つの要素を全て加えた授業を実施し、生徒の歴史の見方・考え方にどのような影響を与え変化があるのか、その実効性を検証した。

2. 実習校での取り組み

2-1. 授業観察

本研究でまず行ったのは授業観察である。現場での教師の授業の教え方や内容、そして生徒の様子を観察することを目的として行った。主に歴史総合と世界史探究の2つを観察した。

歴史総合は特殊なカリキュラムで、教師が生徒に何かを教えると言うことは章最初の概要と最後の補足のみで、あとは生徒に一任するような形であった。教科書の章で区切り、章の中で内容を分けて生徒たちに割り振った。生徒たちはグループごとに問を立て、それについて調べた内容をプレゼンテーションツールにまとめ発表した。

一方で世界史探究は教員の専門性を生かした授業だった。教員がプレゼンテーションツールを用いて進め、生徒はプリントにメモを加えながら学んでいく授業であったが、例えばロシア史では、民謡をロ

シア語で歌うなど、教師の専門性を生かした授業であった。

これら実習校での観察を経てわかったことは、歴史総合も世界史探究も、その根底として「グローバル化」や「大衆化」などが前提として内容の中に含まれているが、実際に、「グローバル化」などの概念について、学ぶことはあまりないということだ。

実際に文部科学省（2009）では、「グローバル化」については、「グローバル化に乗り遅れないようにするか」というこれまでの観点に加え、グローバル化がもたらす問題を含む諸課題に対する教育分野における日本型の対応を横断的に探ることを目指している」としている。つまり「グローバル化」はすでに起きていることゆえに、それに対処する力を以下に身に着けるかに重きが置かれ、「グローバル化」そのものを検討するような形での提言はされていない。

また、現行の学習指導要領解説（平成30年告示）地理歴史編には、このような歴史総合の内容構成について以下のように記している。

「歴史総合」では、このような近現代の歴史の大きな変化を「近代化」、「国際秩序の変化や大衆化」、「グローバル化」と表し、現代の社会の基本的な構造がどのような歴史的な変化の中で形成されてきたのか、それは生徒自身が向き合う現代的な諸課題とどのように関わっているのかなどについて生徒が課題意識をもって考察できるよう、「A 歴史の扉」、「B 近代化と私たち」、「C 国際秩序の変化や大衆化と私たち」、「D グローバル化と私たち」の四つの大項目を設定した。

このように、生徒たちがその中で起きた現代的な諸課題を考えことに重点が置かれ、その視点としての概念であり、概念そのものについて生徒が考える機会はあまり行われていないと考える。

授業観察などの結果を踏まえて、歴史総合における教科書の知識の根底には、「グローバル化」などの概念的な知識があり、それは、世界史を理解していく上では欠かせない「基礎的な知識」のであると考える。ゆえに本研究では、この概念的知識を「基礎的な知識」の1つと位置づけ、その概念について生徒が理解し、考えられるような授業を構想していくこととした。本研究授業では、対象は実習校の1年生30人のクラス1つである。授業時間は授業一回90分であるため、それに対応した形で作成した。

2-2. 研究授業

2-2-1 研究授業の目的と内容

以上を踏まえて、グローバル化する社会に主体的に生きていける生徒を育成するにあたって、「グローバル化」そのものを生徒が検討する授業の構築が必要だと考察した。しかし、ただ概念を教えるのでは、ただの知識の詰め込みのようになってしまう可能性がある。

そこで本研究では、「グローバル化」という概念について生徒が批判的に考えるような授業とした。この中で「批判的に考える」というのは、楠見（2018）¹の考えを参考に、「様々な角度、事象から見て考えること」として扱う。

また、文部科学省では、グローバル化を以下のように定義している。

情報通信技術の進展、交通手段の発達による移動の容易化、市場の国際的な開放等により、人、

¹ 楠見（2018,p461-463）は、次のように、批判的思考を4つの観点に分けて定義した。

- ①客観的、合理的多面的にものごとをとらえる思考である。
- ②自分の思考について意識的に吟味するメタ認知的思考である。
- ③望ましい結果を得る確率を高めるように、認知的スキルを活用した思考活動である。
- ④複数のプロセスと、方略、知識に支えられた統合的思考である。

物材、情報の国際的移動が活性化して、様々な分野で「国境」の意義があいまいになるとともに、各国が相互に依存し、他国や国際社会の動向を無視できなくなっている現象

このような定義がすでにされているが、これを提示しては生徒の思考もこの定義の中で収まってしまい、批判的な思考ができないと考える。ゆえに本研究授業では、生徒がグローバル化とは何かを自分で考える観点から、この定義を生徒に提示することはせずに、生徒に考えてもらうようにした。

さらに、ただ概念について教え、考えるだけでは、学術会議が提言した課題にもあったように、生徒の興味が薄い授業になってしまう恐れもある。そこで、実物の「もの」を通して、生徒が歴史の事象を学び、改めて、「グローバル化」について批判的に考えるようにする。

以上ことから、「もの」としては「じゃがいも」を取り上げることにした。「じゃがいも」を選んだ理由は、大きく分けて3つある。第1に「じゃがいも」は南アメリカに始まり、ヨーロッパ、アジアなどで広く主食またはそれに近い形で扱われているからである。

第2に、歴史上の出来事として、ヨーロッパの食料問題の解決に大きな役割を果たした反面、アイルランドの「じゃがいも飢饉」に代表されるように、この作物に依存した結果、人々に大きなマイナスの影響を与えたという2つの側面を持っていることが上げられる。

そして第3に、生徒にとっても身近であることだ。生徒が普段口にする可能性が高く、スーパーなどの商店でも見かけることが多い。加えて小学校学習指導要領解説（平成29年告示）家庭編の衣食住の分野で扱うことが推奨されていることもあり、生徒が小学校の授業でも覚えがあると考えられる。

2-2-2 研究授業の流れ

これら3点を踏まえて作成した本研究授業は、最初に目標である「グローバル化を批判的に見て、自分なりの考えを持つ」ことを生徒に提示し、授業の方向性を示した後、生徒が持つ「グローバル化」についての知識の確認を行った。

次に、取り扱う時代の背景となる気候について話した。当時が小氷期と呼ばれる寒冷の時代であることを話し、この時期に起こりそうなことを班になって生徒に予想させた。さらに、授業で用いる「じゃがいも」についても生徒に紹介し、今生徒が持っている「じゃがいも」の知識を出してもらった。

以上を行った後に、「じゃがいも」の歴史的な歩みを生徒に話した。特にヨーロッパでは、ドイツ、フランス、イギリス、そしてアイルランドである。これらの国の共通点として、どの国も飢饉や戦争、政治的な問題などで、食料の問題に直面していた中で「じゃがいも」が流入し、国民の食生活及び、国全体の食文化にも影響を与え、生活の安定に貢献したことが挙げられるからである。

上記のプラスの側面を話したのちに、マイナスの影響を取り扱った。そこでは、アイルランドの「じゃがいも飢饉」を題材とした。最初に生徒たちに「広がることはいいことなのだろうか？」と問いかけて本題に入った。まず「じゃがいも飢饉」の簡単な概要を説明し、1枚の絵画を見せた。提示した絵画はダニエル・マクドナルドの『アイルランドの小作農一家、貯蔵品の青枯病を発見』（1847年）である。生徒たちには登場する人物などに注目させ、この絵画からわかることを班ごとに予想させた。予想後に、この事件後のことを生徒たちに教え、もう一度「広がることはいいことなのだろうか？」と問いかけた。

このマイナスの場面では、特にモノカルチャー経済などに注目させた。具体的には、「じゃがいも」の単一栽培による依存が1つの要因であることや、地図上でアメリカから青い矢印を伸ばし、世界とつながるとマイナスの要素も入ってきてしまうことも「グローバル化」の側面であると生徒たちに伝えた。

以上に加えて、日本との関係も取り上げた。江戸時代並びに明治時代の日本との関係を、これまでのヨーロッパでとり扱ったことや、前提としての気候のことを復習する形で、日本でどう広がったのかを山梨県と北海道に焦点を当てて伝え、その後全体のまとめに入った。

2-2-3 研究授業における生徒の反応

研究授業を受けて、生徒たちの考えなどに変化があったことが伺えた。本研究では生徒の考えに変化があったかを検証するために、授業最初の既存知識の確認と、最後のまとめのところで、「①グローバル化とは何か」と「②グローバル化することはいいことか」の2つを生徒に聞き、考え方の変化を見た。

結果は、授業の最初のほうでは、アンケートをとった30名のクラスの内の全員が「①グローバル化とは何か」という問いに対して、マイナスの表現が含まれたような記述は見られなかった。

しかし、授業の最後では、30人中9人が、マイナスの側面にも触れた問への回答をしていた。他の生徒の回答も、前の回答とは少し違っており、全く同じということはない。そのため、授業が生徒の思考に影響を与えたと考えられる。

一方で②のほうは、「いいこと」か「悪いこと」の二者択一で聞き、その理由も答えてもらった。結果は、「いいこと」と答えた人は9割近くに上り、その結果は授業の前後で変わらなかった。しかし、理由の方では、大きな変化が見られた。グローバル化の良い面と悪い面を踏まえて理由を記述している生徒は、最初は29人中6人であったのに対して、授業最後にもう一度答えてもらったときは、両方の見方を踏まえて書かれていた記述は28人中25人となり9割に上った。

例えば、生徒Aは最初「いいこと」と考え、理由として、「(世界中が) 様々な物・情報が入ってくることで、いろいろな体験や見方ができるようになるから」とプラスの影響のみを書いていた。それに対して授業後は、同様に「いいこと」としながらも、「色々な場所から色々な物などが入ってくると良くないことが起こってしまうかもしれないけど、そこから対策などを学ぶことで、もっと世の中がよくなっていくと思うから」とプラスとマイナス双方の見方を取り入れて考えることができていた。

さらに回答を分析すると、いくつかのグループに分かれることがわかった。例えば、今回の授業を受けて、グローバル化の課題点などはわかったが、あくまでも過去のものとして見ており、現代ならばそれを解決できると考えているグループ。他には、このような課題がグローバル化によっておこるからこそ、その解決をする方法が見つかり、それが結果的に世の中をよくしていくと考えるグループだ。

特にこの2つのグループは、歴史的事実と現代の生徒が持つ常識を自分の中で比較しながら、グローバル化を再検討したと伺える。グローバル化を「いいこと」とした生徒たちの中には、現在の生徒が持つ世界の価値観から、さらに深く考えていることが伺えた。それは結果的にこちらが提示したものではないことを、生徒たちが自分から学習内容と照らし合わせて検討したことになる。

このような生徒たちは、両方の見方を踏まえて書かれていた記述の25名の中で10名ほどおり、彼らは、3要素の1つである「現代とのつながりを意識できるか」を自ら行っていた。それが結果的に他の回答と比べてより深い意見となっていることから、3つの要素を含んだ授業が、生徒たちの「グローバル化」に対する見方・考え方に影響を与え、学習で学びを深めるものであったと考える。

3. アンケート

3-1 授業アンケートの概要

このような授業中での検証に加えて、同様の生徒たちにアンケートを実施した。このアンケートでは、生徒の歴史を学ぶことに対する意識と生徒の歴史の学習に対する考えを理解するとともに、授業前後でその考えに変化があったかを見ることを目的としている。

アンケートの実施は、前週の研究授業直前の授業で1回目を行い、2回目は授業の最後に行った。質問内容は「歴史学習への興味関心に関する」と、「歴史を学ぶ上で重視していること」に分けた。後者では小尾(2023)で実施したアンケートの項目を一部用いる。

3-2 アンケート① 生徒の歴史を学ぶことへの意識調査

前者の質問は、歴史学習の好き嫌いに関する4つの質問を用意した。この質問では、好きなほど5を、嫌いなほど1に近い数を生徒は回答するようになっている。1回目は図1のようになった。

アンケートの結果から、歴史自体は嫌いではないが、「歴史総合」という科目や「世界の歴史」となると、そこまで好きではないまたは嫌いとなる傾向が見られた。

特に「世界の歴史」に関係すると、全体の1/3近くが2以下印象を持っていた。本研究では4の質問を、「世界史」ではなく、「世界の歴史」とした。これは、1年生では、「世界史」をまだ学習していないため、そこを考慮した設定である。そのように言い換えても、嫌いの傾向が他より高かったことから、科目である「世界史」になると、さらに増加する可能性があるかと推測する。加えてこの結果から、世界史教育の課題として生徒の「世界史への関心の薄さ」が挙げられていたが、それが現在でも生徒たちの中にあるのではないかと考える。

次に、授業後に同じ質問をしたときの結果を図2でまとめた。授業後のアンケートでは、「回答拒否」

(図2のグラフの一番右)が1名出ていることを踏まえても、授業前後で、「世界の歴史を学ぶことは好きか」という質問が顕著に変化していた。授業を通して、世界の歴史を学ぶことに関することへの興味関心を高めることに繋がったと考える。

実際に、生徒の感想から、「じゃがいもという意外な観点から考えて、苦手を感じる歴史も、歴史的背景を踏まえながら楽しく学ぶことができた。」や、「グローバル化は良いことだと思っていたけど改めて考えてみるとあまり良くない一面もあるということなど、普段考えないことを考えることができて面白かった。」などの意見が出ていた。このような意見は、本研究授業の内容とその中の3つの要素が生徒の見方・考え方に実効的に作用したことによって、生徒自身が既存知識を発展させ、より深い学びをすることができたため、好意的に授業を受けられたことを示していると考察する。

加えて、現場の先生方からも、「じゃがいも」を授業の主役に据えて取り組むことは面白い」という評価をいただいた。生徒にとって身近な内容であったため、それが内包している歴史を知ることが生徒たちに興味を持たせることにつながったと考える。その結果アンケートでも、世界の歴史を学ぶことに対する生徒の印象は、授業前に比べて「好き」の傾向をとる生徒が増加している。このような結果から、授業が生徒の歴史学習に対する意識に影響を与えられたと考える。

図1. 生徒の歴史学習に対する興味関心 (授業前)

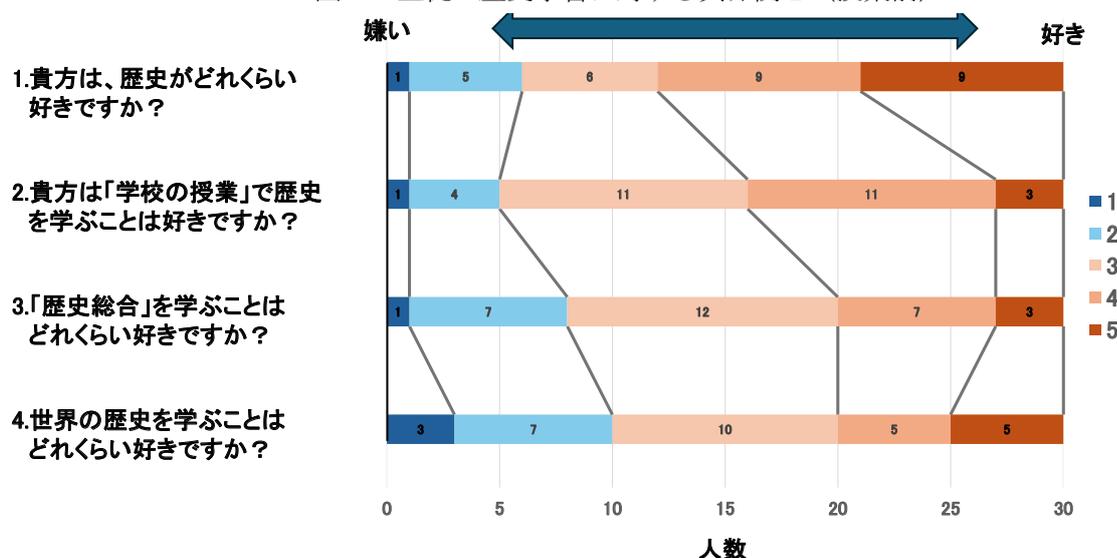
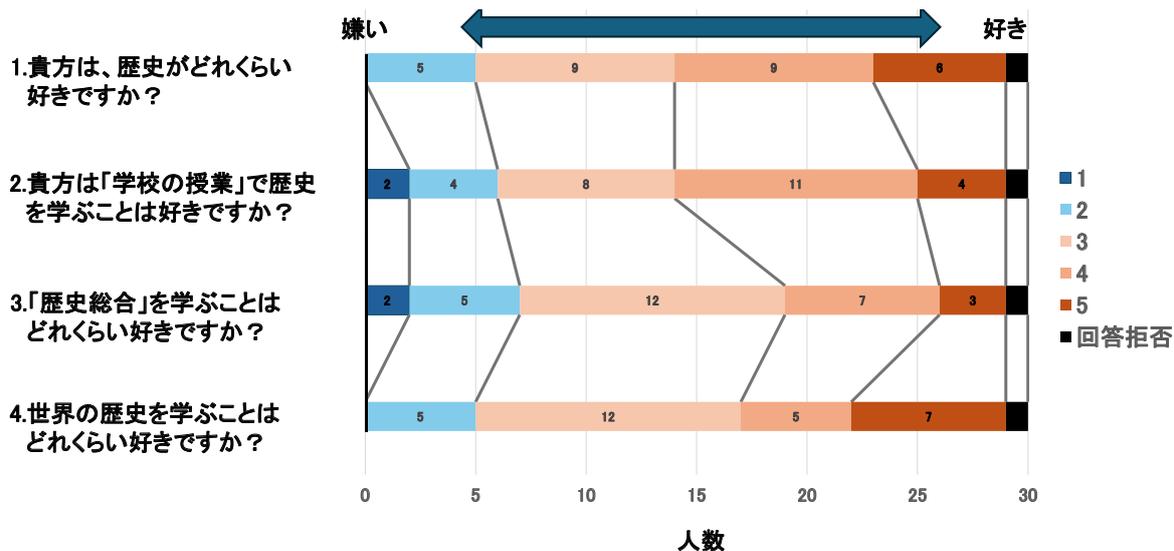


図2. 生徒の歴史学習に対する興味関心（授業後）



3-3 アンケート② 生徒の歴史を学ぶ上で意識していることについての調査

次に、「歴史を学ぶ上で重視していること」について質問をした。質問は計4問で、質問ごとに「授業で歴史を学ぶこと」など聞き方を少し変えてアンケートをとった。質問項目は、「ア）基礎的な歴史の知識」、「イ）同じ時代に他の地域では何があったのかという横のつながり」、「ウ）様々な角度から事象を見て客観的に考える」、「エ）私たちの生活とのつながり」、「オ）受験に役立つ知識」の5項目と質問ごとに異なる質問3項目を設定した。

上記の質問は、3つの要素と小尾（2023）で回答が多かった項目を参考にしながら設定した。さらに、「カ）～（ク）については、小尾（2023）で少数であった項目を4つの質問で別々に入れた（グラフでは「その他」にまとめた）。これによって、5つの仮説の立証を図りつつ、生徒が本研究授業の重要な核となる「多面的・多角的な視点」などの3つの要素を意識できたかを見取ることとした。

図3. 生徒が歴史学習で意識していること（授業前）

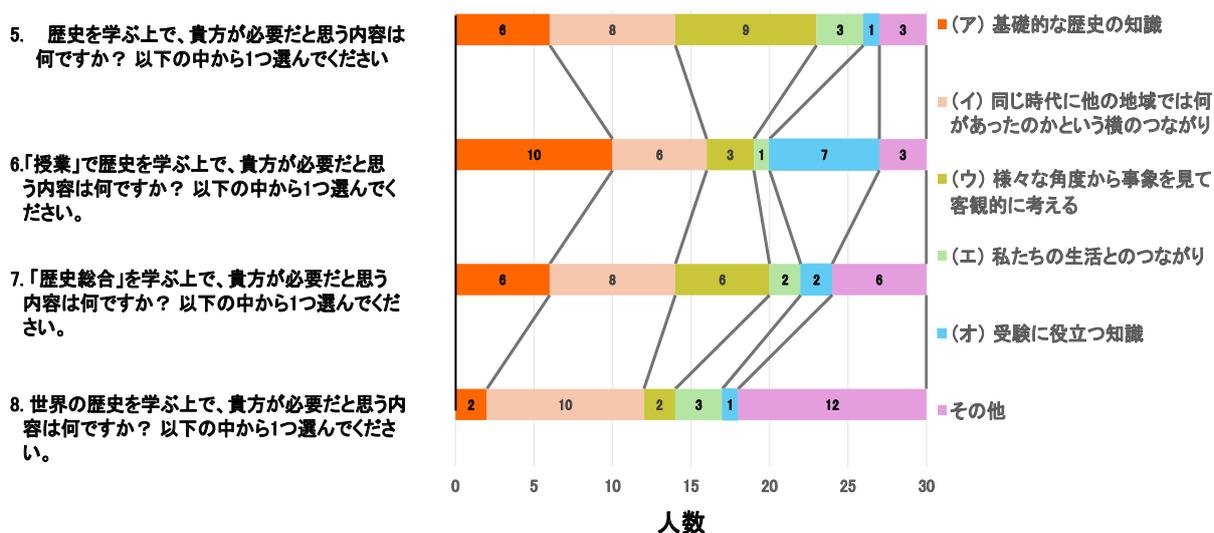


図4. 生徒が歴史学習で意識していること（授業後）

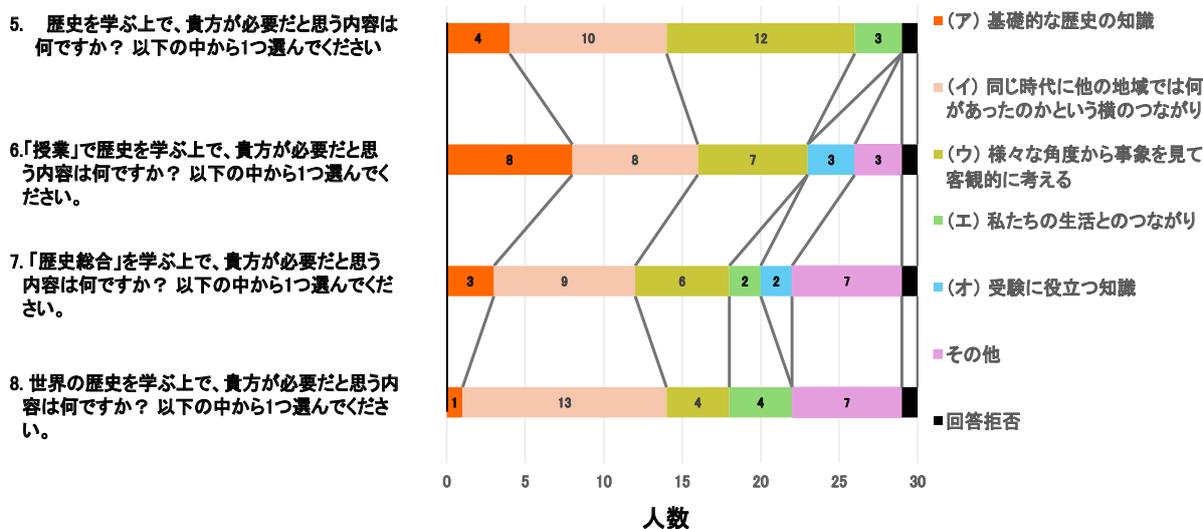


図3,4の結果を見ると、授業の前後で変化を見ることができた。特に「8. 世界の歴史を学ぶ上で、貴方が必要だと思う内容は何ですか？」では、(カ)～(ク)を多くの生徒が回答していることが伺えた。

しかし、授業後のアンケートでは、特に(イ)、(ウ)に回答が集中した。他のアンケートでも、同様に、(ア)～(ウ)を授業後回答した生徒が多い傾向にあった。特に(イ)、(ウ)は一昨年からの研究における世界史教育における3つの要素を含んでいる質問であり、これは、研究授業が生徒たちの歴史の見方・考え方に実効的に作用したことが大きく影響していると考えられる。

また、他のアンケートのところでも、例えば(オ)の「受験に役立つ知識」というのを、6問目の「授業」で歴史を学ぶ上で、貴方が必要だと思う内容は何ですか？」の中では、当初30人中約7人が意識していると答えた。それに対して授業後では、29人中3人ほどとなっていた。

受験を意識した学習は、生徒自身の意識としては悪いことではない。しかし、授業の中で教師がそれを意識してしまうと、知識偏重型の授業になってしまいがちになる可能性を秘めている。そのため、本研究授業のような学習の仕方が、間接的に受験にも生かせることが望ましいと考える。

今回のアンケート結果では、生徒の歴史の見方・考え方に影響を与えられたことができたと思う。その中で、(イ)、(ウ)の回答の増加などから、3つの要素を生徒が授業を通して意識し、自らの考えを深めていくことができたかと推測する。

3-4 研究授業全体を振り返って

以上のことから、生徒は授業の核となる要素や目標などを理解し、考えを深めながら取り組むことができたと思う。この結果から、授業の構成として身近な事柄を「近代化」や「大衆化」などの歴史総合を構成する要素にも適応することによって、生徒が基礎概念の理解を深め、歴史総合やその先の世界史探究及び、日本史探究での学習内容の理解を深めていくことに繋げられると考える。

これを活用する例として、歴史総合では、最初の「歴史を学ぶ意義」を理解するところで、この内容を取り扱い、身近なところから、生徒が「グローバル化」などの概念を考え、学習に挑みやすい態度の育成などにも貢献できると考える。

加えて本研究授業では、あえて、「いいこと」・「悪いこと」の二項対立という形で生徒たちに考えさせるようにし、それに対応する形で「じゃがいも」が人々にもたらした「よい面」と「悪い面」という形で授業を展開した。生徒は、完全にどちらかに言い切ることが難しいのではと気づき、様々な側面から

事象を捉えて判断する必要があることを理解したと考える。よって、歴史の見方・考え方を身に付ける点において有効な授業であったと言える。

4 課題と今後の展望

上記のような成果があった反面、今後の研究で改善していく必要のある課題も複数見受けられた。

まず、多角的（社会的事象を様々な角度から捉えること）な見方で生徒が考える機会が無かったことが挙げられる。授業では、欧州での「じゃがいも」の広がりを多角的としたが、それは教師が教授するだけであった。それを生徒が班ごとに違う国を調べ、整理し発表するような形にしたり、「グローバル化」が、農民や資本家にとってはどうだったかという問として生徒に考えさせたりすることで、様々な立場で生徒が「グローバル化」を検討できると考える。そして最後にも、「あなたにとってグローバル化はいいことか」と考えるようにし、自分事として改めて「グローバル化」を検討することできると考える。このような授業内容として、今後調整していきたい。

また、「グローバル化」を見るための視点として本研究では、「じゃがいも」を授業の題材として用いたり、グループワークを実施したりしたが、それらが生徒たちにとっては、印象が強すぎてしまい、本来の「グローバル化」が薄くなってしまったところも課題であると考えられる。

実際に生徒たちに授業の感想を授業終了時にアンケート形式で聞いた。今回はあえて内容に言及しないことで、生徒たちが本当に興味を持てたところを見ようとした。その結果、授業内容に関して、「グローバル化」よりも、「じゃがいも」の方を書いている生徒の方が多かった。そのため、授業内容の確認が授業の中で何回か行うことが必要になると考える。

以上のことは、教科の興味関心につながっていると考えられる。実際に歴史学習への意識を聞くアンケートで、歴史総合に関しては、数値に変化がないことが伺えた。そのような意見から研究授業と生徒がこれまで受けていた歴史総合を別にして考えている可能性があると思われる。

また、本研究では、3要素の実効性の検証が目的であったが、「現代とのつながり」が薄くなってしまったところがあった。計画では授業の最後に、現在とのつながりを生徒に問いかけ、考える時間を用意していたが、それが時間の関係上できず、伝統的な料理の紹介のみで終わってしまった。以上のことから、3要素を1つの授業に全て入れようとすると、時間が無かったり、どれかが薄くなってしまったりすることが証明されたと考える。そのため、各要素単体で授業を作成し、それぞれに生徒が触れながら、「グローバル化」などの概念を生徒が検討できるように時間を設定し、改めて要素の検証や生徒の見方・考え方の変化などを見ていきたい。

○. 参考・引用文献

伊藤章治「ジャガイモの世界史 歴史を動かした「貧者のパン」」、中公新書、2008年。

小尾英廣「新課程における世界史教育の要素 -要素を取り入れたカリキュラムの構想-」、山梨大学教職大学院、令和4年度、教育実践研究報告書、2023年。

楠見考「批判的思考への認知科学からのアプローチ」、『認知科学』25巻4号 p.461-474、2018年。

日本学術会議「提言 歴史総合に期待されるもの」、2016年、

(<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-t228-2.pdf>) 閲覧日 2024年12月24日。

文部科学省「国際教育交流政策懇談会（第1回） 配付資料」、2009年、

(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/kokusai/004/gijiroku/1247190.htm) 閲覧日 2023年12月24日。

文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 地理歴史編』、東山書房、平成31年（2019年）。

文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 家庭編』、東京書籍株式会社、平成30年（2018年）。